【公開講演会】

「大島康徳氏が語るベースボールの魅力」

2012 年 5 月 19 日（土）15：00～17：00
名古屋キャンパス白鳥学舎翼館クラインホール
【参加者　240 名】

【講師】◆話し手：大島康徳氏
（元中日ドラゴンズ主砲として活躍、日本ハムファイターズ移籍後も当時史上最年長で 39 歳 11 カ月で通算 2000 本安打を達成し、日ハム監督をされた後、現在解説者として活躍中）
（2 部）齋藤健治（本学スポーツ健康学部准教授・硬式野球部部長）
◆聞き手：犬飼俊久氏（元東海ラジオアナウンサー）

第 1 部：大島康徳の野球人生

犬飼俊久氏が聞き手として迫る。

大島氏の経歴を説明後、「野球人生の中で、野球で得たこと、活かしていること、広く皆さんに知ってもらいたいことなどを語っていただきます。小さいうちから野球をやり続けてプロになる人が多い中、大島氏は高校で初めて野球を始めました。」と続け、大島氏に野球人生を語っていただいた。

大島氏「小中学生はテニス、中学 2 年のころはバレーボールをしていた。当時の夢は学校の先生で、バレーボールでオリンピックに出たいと思っていた。中学時代は身体が大きかったので、陸上・バスケ・相撲など色々な分野の大会に駆り出され、そこで結果を出せた。相撲大会では優勝し、中津工の先生に相撲部にと声をかけられたが、練習のあまりの厳しさに辞退した。すると今度は野球部を勧められた。当時は、プロ野球を見たこともなく、野球を全く知らなかったため、断っていたが、スパイクを履いたら良い感触。グラブをはめたらとてもいい匂いがしたので野球をやることにした。勧誘がなければ野球はやっていなかっただろう。高校当時は『ハロー・グッバイ』とあだながついたくらい練習が嫌いで、まさかホームラン 1 本打ったくらいでプロ野球選手になれると思わなかった。」

「私は、自然任せでここまできた。子供の頃は、ひとつの道だけ究めるのではなく自由に色々なことをやればよい。道は必ずあるのだから。」

「プロ野球選手はなろうと思ってなった職業ではない。プロ野球を見たことも興味もなく、野球を全く知らなかった人間が 44 歳まで野球をやった原点は『負けてたまるか』。その何文字かで 44 歳まで続けた。そこには給料の違いもあった。当時はバット・グローブ・スパイク全部自前で買った。給料が少なく遊ぶお金がない代わりに、練習時間はたくさんあった。そして、がむしゃらに練習した。また、『隔年の大島』と呼ばれ、代打での出場ば

かり、レギュラーも取っているようで取っていない状態が続いており、タイトルにも興味がなかった。ある日、野村克也さんがＴＶで話しているのをたまたま見て、あきらめてはいけないと悟った。今日できたことを少しずつ伸ばし、あきらめないで継続することを続けた。これがいろいろなタイトルにつながった。もう一つのきっかけは長兄が白血病で亡くなったこと。今まで怖いと思っていたボールが突然怖くなくなった。頼むよと心の中で声をかけてから、何も考えずにバッターボックスに立つといい成績が出た。この 1977 年、打率 3 割 3 分 3 厘、27 本塁打をマークしレギュラーの地位を固めた。これでやっとプロ野球界でやっていけるのかなと思えた。」

「最近、パリーグの DH 制導入や科学的トレーニング、酷な使い方をされないなどの要因で野球人生が伸びてきた。見る側とやっている人の空間を共有し合って面白みを出すことが必要。例えば、WBC でイチローが出場することになり、初回練習でライトからレーザービームを投げた。イチローは、すでにその練習に向けて調整していた。この見せる意識と見られる意識こそが健康、技術を向上させる秘訣だ。」

第 2 部：ベースボールの魅力とは

「野球に関する研究、動作計測を基に指導法への発展」などの研究テーマに取組む本学スポーツ健康学部准教授であり硬式野球部部長でもある齋藤健治准教授が加わり、データをもとに進行した。

〇速い球、遠くに投げるためには

齋藤准教授は、150 キロ投手の特徴としてダルビッシュ投手の投球フォームの写真データを提示。体幹の捻転を維持し肩の回転をより遅くさせており、踏み出してもまだ投げていない状態。いかに上手に体を回せるかが大切だと説明。

大島氏「知識を知っていると故障しない。理想の動きを知る事、あとは自分でアレンジをする。誰もダルビッシュやイチローにはなれないが、努力をすれば近づくことはできる。でもダルビッシュのような投手は考え方と強いハートがあって初めてダルビッシュだ。」また、自身の監督経験から「言うもコーチ言わぬもコーチ、過度の期待をかけず長所を伸ばしてやること」と語る。

〇打球を遠くに飛ばすためには

・インパクトでの大きなヘッドスピード

・股関節とひざ関節を使った腰部の回旋

という齋藤准教授に対し、大島氏が実際にバットを取り出し、下半身の力を上半身にどれだけうまく連動させるか、いかに体の近くを通り回転させるかだと、バットを振って説明。「頭でわかっていても出来ない。出来るようになるには練習しかない。体に思いこませるのだ。」と語る。

また、長打の特徴として、齋藤准教授より、日本人選手とキューバ人選手の打撃比較のデータ提示を受け、スイングは筋力などから日本ではダウン・アッパースイングに対しレベルスイングが正解だとした。

そして、「プロは現場で 100 点取るために常に考えイメージトレーニングが必要。イメージに体がついてくることでプロになる。素質だけではない。かくれた努力をすることで一流になるのだ。44 歳まで現役でやれたのは技術とハートをもっていた。自分に対する投げ方はどうか、きたボールを打つのは　読みがあるから打てる。」と自身で考える力を持つことを強調した。

この後、『ドラゴンズ時代の良い試合の思い出について』『野球の人気低下を感じるがどう思うか』『完封ゲームが多くなったのはなぜか』などの質問に丁寧に答え、野球ファンを魅了させた。

最後に、犬飼氏が「TV を見たり、球場に足を運ぶなどして、実際に野球を見た際に、野球の見方が変わってもらえるとよい」と締めくくり、講演会を終了した。

（文責：地域連携センター長　家本博一）